

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2019 年8月2日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 こころの未来研究センター

職 名・学 年 特定准教授

氏 名 熊谷 誠慈

助成の種類	平成31年度(令和元年度) ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第15回国際チベット学会 (15th Seminar of the International Association for Tibetan Studies)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	ドゥク派の開祖とその門弟たち(The Founder and Disciples of the Drukpa Kagyu school)		
開催場所	フランス共和国 パリ National Institute of Asian Languages and Civilizations (INALCO: フランス国立東洋言語文化学院)		
渡航期間	2019年7月6日 ~ 2019年7月13日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	30万円	
	使用した助成金額	30万円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券代・国内旅費(一部)	10万円
		宿泊費、滞在費(一部)	17万円
学会参加費(一部)		3万円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 何時も迅速なご対応を頂き大変感謝しております。		

◎国際研究集会の概要

国際チベット学会は、3年に1度開催されるチベット学最大の国際研究集会であり、各国の著名なチベット学研究者が参加する。また、ブータンやシッキムなどのヒマラヤ南麓地域、或いは北方のモンゴルやブリヤートなど、広くチベット文化圏を扱う研究者も参集する大規模な国際会議である。

申請者は、2019年7月7日～13日開催の第15回国際チベット学会において、「ブータン、シッキムおよび周辺地域の文化研究」(Cultural Studies in Bhutan, Sikkim and the Surrounding Regions)と題する学術部会を、共同議長として主催した。もう一人の共同議長は、インド共和国のナムギェル・チベット学研究所(Namgyal Institute of Tibetology)のアンナ・バリクチ・デンジョンパ博士である。

同学術部会においては計22名の東ヒマラヤ学の研究者が口頭発表を行った。彼らの専門分野は、歴史学、宗教学、言語学、開発学、文化人類学、社会学と多岐にわたり、また対象地域はブータン、シッキム、アルナーチャルプラデーシュと広く、学際的かつ超地域的な学術情報の交換が活発に行われた。

申請者は、同学術部会および出版企画の責任者であり、同集会に運営委員および発表者として関与することで、東ヒマラヤ学の発展と学際的な国際研究者ネットワークの構築に寄与することができた。

公益財団法人京都大学教育研究振興財団のご支援に、記して御礼申し上げます。

◎発表の概要

ブータン王国には、ドゥク派とニンマ派という2つの仏教宗派が多数派を占めており、前者は同国の国教となっている。ドゥク派の開祖はツァンパギャレー(1611-1211)という人物であるが、近年までツァンパギャレーの著作は殆ど入手できなかったため、彼の人物像や思想の詳細は長らく謎に包まれていた。現在、申請者が中心となり、彼に関する主要な伝記と歴史書、そして、入手し得た全ての著作の解析を進めている。

また、ドゥク派という宗派の組織、特に、ツァンパギャレーの弟子たちについても、体系的な解明はなされていない。伝統的に、ツァンパギャレーの弟子は「上ドゥク派」(sTod 'brug)、「下ドゥク派」(sMad 'brug)、「中ドゥク派」(Bar 'brug)と3つのドゥク派に区分されるといふ説明がなされてきた。しかし、この区分は、歴史学的観点から、或いは内容的に果たして適切なものと言えるのであろうか。

本発表では、ツァンパギャレーの弟子に焦点を当て、その区分法について再検討することを目的とし、特に、上・中・下の3つのドゥク派の区分の起源と妥当性について再検証を行った。

本発表では、5つの歴史書・宗義書に記載されるドゥク派の区分を概観した。

1. *lHo Rong chos 'byung* (composed in 1446)
2. *Deb ther sngon po* (composed in 1478)
3. *Pad dkar chos 'byung* (composed in 1575)
4. *Thu'u bkwan grub mtha'* (composed in 1801)
5. *lHo 'brug chos 'byung* (composed in 1972)

まず、*lHo Rong chos 'byung* の時点で、すでに、「最初の偉大な弟子」、「真中の偉大な弟子」、「最後の偉大な弟子」という直弟子の年代的な3種区分が行われていた。しかし、「真中の偉大な弟子」にギャヤクパが含まれておらず、2名ずつ計6名の直弟子という人数設定はなされていない。なお、グーツァンパとローパを「上ドゥク派」・「下ドゥク派」と区分する分類はすでに存在していることが判明し、報告した。

続く *Deb ther sngon po* の時点では、「真中の偉大な弟子」にギャヤクパが含まれており、2名ずつ計6名の直弟子という人数設定がなされるに至った。しかし、この時点ではまだ「中ドゥク派」という区分概念は存在していないことが判明、報告をした。

また、本調査により「中ドゥク派」という区分概念が初めて確認されるのは、ペマカルポの *Pad dkar chos 'byung* においてであることを突き止めた。ペマカルポは、最初の偉大な2人の弟子（パリワとキャンモカパ）と、真ん中の偉大な2名の弟子（ギャヤクパとデモワ・サンギェーブム）以下の伝統を、「中ドゥク派」に充てている。チベット・ブータンの伝統的な歴史家や、西洋の歴史家たちは、ドゥク派の区分として、上・中・下の3つのドゥク派という区分を無批判に用いる傾向があるが、この区分設定は必ずしも古いものではない点に注意が必要である。

ペマカルポ以降、上・中・下の3つのドゥク派という区分が定着し、一般化していったが、その内訳は必ずしも一致しているわけではない。*Thu'u bkwan grub mtha'* の中では、「中ドゥク派」がダルマセンゲ以下の系譜と説明されている。他方で、ペマカルポの主張する最初の偉大な2人の弟子（パリワとキャンモカパ）と、真ん中の偉大な2名の弟子（ギャヤクパとデモワ・サンギェーブム）以下の伝統は、「中ドゥク派」と見做されていない。

lHo 'brug chos 'byung においては、ペマカルポの説明と同様、最初の偉大な2人の弟子（パリワとキャンモカパ）と、真ん中の偉大な2名の弟子（ギャヤクパとデモワ・サンギェーブム）以下の伝統が、「中ドゥク派」には充てられる。したがって、トゥカンの「中ドゥク派」理解は、チベットの歴史家たちには（少なくともドゥク派には）根付かなかった可能性が高い。

すなわち、「上ドゥク派」・「中ドゥク派」・「下ドゥク派」という有名な3つのドゥク派の区分は、決して古いものではなく、恐らく Pema Karpo (Padma dkar po, b.1527-d.1592)あたりの時代、すなわち16世紀頃に登場した新たな区分法だったのではないかという結論を報告した。すなわち、それ以前には別の区分法が一般的であったが、この新たな区分法が定着し、一般化していったということである。